BOOK IX — 自由の代償

第02章 — 百年計画

01 — 最初の実験

朝になると、病院の地下を通る配管の水は、本来の温度よりも温かくなっていた。誰かが研究棟に仮設の冷却回路を接続したため、古い建物は新たに加わった負荷に応えるかのように、壁の内側で音を立てていた。

レイチェルはその音をたどり、かつて診断機器の修理に使われていた部屋にたどり着いた。新たにその部屋を使う者たちは、二つの作業台の間に、スーツケースほどの大きさしかない実験チャンバーを置く場所を確保していた。

エイドリアン・タイレルがその脇に立っていた。作業台には、百年計画の当初の研究提案書が広げられていた。

「彼らはこれを予備実験装置と呼んでいた」と彼は言った。「だが、図面の寸法と機器一覧の記載が一致しない。実際に何を作ったのか、確かめる必要がある」

リンという技術者が、すでに三つの密封された試料をトレーに並べていた。どれにも生体組織は含まれていなかった。それぞれ異なる世代の規格に従って製造された、合成支持材料の断片だった。

一つ目は初期のレプリカントに使われていた材料を再現したもの。二つ目は比較的最近になって製造されたもの。そして三つ目は、ハヴェルの回収資料に記載された構造部材を可能な限り忠実に再現したものだった。

実験には患者が関与していなかったが、レイチェルは同意と安全に関する記録に目を通した。患者がいないからといって、得られた結果をどのように扱うか、記録する必要がなくなるわけではない。

ロイがコーヒーを二杯持ってやって来た。小さなチャンバーを見ると、足を止めた。

「それが百年計画か？」

「今日の実験よ」とレイチェルは答えた。

彼はコーヒーを一杯、彼女に渡した。

「百年にしては小さいな」

「百年なんて、作業台に載せられるものじゃないわ」

リンはチャンバーを閉じ、測定機器を起動した。画面に同じ三つの図が現れた。材料に測定可能な変化が生じるか、あるいは機器が信頼できる基準を維持できなくなるまで、試験は続けられることになっていた。

研究記録の最初の行には、日付と部屋にいる者たちの名前、そしてこの実験で何を立証することはできないかが記されていた。

誰一人として、命を危険にさらすよう求められてはいなかった。

02 — 時計のない制限

ハヴェルの資料に記録された制限は、何十年もの間、六年の時計と呼ばれてきた。だが、病院で調べられた身体の内部に、そのような物体は存在しなかった。

時間とともに劣化する生物学的、構造的な過程があった。そして、その劣化をどこまで修復できるかを制限するよう設計されたシステムもあった。エイドリアンが理解しようとしていたのは、この二種類の劣化の関係だった。

彼はロイに、傷んだ橋を想像してみてほしいと言った。

「橋を一度も修繕しなければ、いずれ崩壊する。だが、それだけでは誰かが特定の日に崩壊させようとしたかどうかは分からない」

「誰かが修繕できないようにしているなら、別だろう」

「そのとおりだ。ただ、どんな修繕が必要なのかは、依然として確かめなければならない。制限を取り除くだけで、橋が安全になるとは限らない」

ロイは実験チャンバーの観察窓をのぞき込んだ。白い光の下では、三つの試料の違いを見分けることができなかった。

「俺の身体は、どの程度そういう造りになっている？」

エイドリアンは答えをためらった。ロイの現在の身体について、完全な製造記録は存在しなかった。複数の資料庫から回収された断片をつなぎ合わせても、まだ真正性が確認された記述にはならなかった。

「調べる許可を得た材料について、何が分かったかは話せる。だが、君の身体がそれと同じだとは言えない」

ロイはその違いを受け入れた。それで気が楽になるわけではなかった。彼は自分に残された寿命についてのいくつもの計算を超えて生き延びてきた。だからといって、もう計算の対象ではなくなったということではない。

レイチェルは当初の計画の研究ノートを画面に呼び出した。ある一節には、一定の稼働サイクルを経た後に修復の許可が自動的に取り消される仕組みについて記されていた。その次の一節には、エネルギー不足の状態で劣化が加速することが記されていた。

誰かが、その二つの段落に疑問符を付けていた。

研究者の名前は削除されていたが、その印は残っていた。

「彼らにも分からなかったのかもしれないわね」とレイチェルは言った。

エイドリアンは手書きの注記を拡大した。数秒間、何も言わなかった。

「あるいは、答えを知るのが怖くなる程度には分かっていたのかもしれない」

部屋の外では、病院の職員が携帯型モニターの電池を交換していた。電池が一本ずつ所定の場所にはまる音が、ロイには聞こえた。彼はその作業が終わるのを待ってから、当初の計画が患者を治療する段階にまで進んだことがあったのかと尋ねた。

現存する記録に、その答えはなかった。

03 — 同意の条件

十一時、イマニはセナを小さな診察室へ連れてきた。前日よりも少ない介助で歩けるようになっていたが、テーブルにたどり着くと、セナはすぐに椅子に座った。

彼女とレイチェルの間に、一枚の同意書が置かれていた。一ページ目には、今後の研究への参加は任意であると記されていた。セナはページをめくり、署名によって与えられる許可には、目的の特定されていない将来の研究のために生体試料を保管することも含まれていると気づいた。

「私から何かを採るかもしれないっていう、そのことだけだと思っていた」と彼女は言った。

「そうよ」とイマニは答え、同意書に手を伸ばした。

「じゃあ、どうして将来の研究って書いてあるの？」

同意書は病院の標準書式を一部変更したものだった。職員の誰もが見慣れていたからこそ、その文言がどこまでの許可を含むのか、誰も気づかなかったのだ。

レイチェルはペンを取り、その段落に線を引いた。

「別の書式が必要ね」

セナは彼女を見つめた。「次の実験は嫌だって言っても、ここで治療を受けられるの？」

「ええ」

「その実験が、ほかの人たちの役に立つかもしれなくても？」

「ええ」

イマニは一ページ目に一文を加えた。研究への参加を選択するかどうかにかかわらず、通常の診療は継続される。修正後の文書は使用前に審査を受けなければならない。それまでは、計画のために患者から試料を採取することはない。

セナはテーブルの上で両手を組んだ。

「これを読ませなくても、そう言ってくれればよかったのに」

「そうすることもできたわ」とレイチェルは答えた。「でも、それでもあなたは間違った書類に署名することになっていた」

扉がノックされた。事務職員が、受付に目録査察官が来ているとイマニに伝えた。国防事務局の身分証を携え、寿命延長研究に関係する患者の名前を要求しているという。

イマニは立ち上がった。

「その研究に登録された患者はいません」

事務職員は、査察官が『参加予定者』という言葉を使っていたと答えた。

セナは署名していない同意書に視線を落とした。部屋に入ってきてから初めて、彼女はおびえた様子を見せた。

レイチェルは書類をテーブルの端から遠ざけた。

「病室に戻っていいわ。ここから先は、あなたが対処しなければならないことじゃない」

セナはすぐには立ち上がらなかった。

「私の名前を渡さないで」と彼女は言った。

04 — エネルギーの問題

正午、実験チャンバーが最初の有意とみられる偏差を報告した。三つ目の試料が、試験条件の変化に対して異なる反応を示したのだ。

リンは測定を繰り返した。同じ結果が得られたが、今度は差が小さくなっていた。測定機器を独立して校正されたものに交換すると、差は依然として検出できたが、測定の不確かさの範囲内に収まった。

エイドリアンは落胆した。レイチェルは予備の測定機器が用意されていたことに安堵した。

彼らは両方の結果を記録した。

別の作業台には、古いヘリウム3の提案書に記載されていた小型電源装置の密閉された展示用模型が置かれていた。それには燃料も、稼働する反応室もなく、エネルギーを生成する能力もなかった。図面に登場する部品の寸法を確認するためにしか使えないものだった。

エイドリアンが難点を説明する間、ロイは模型の周囲を歩いた。

生体組織を長期にわたって維持するには、必要な場所へ、組織が利用できる速度でエネルギーを供給しなければならない。制御系を理解せずに供給量だけを増やせば、損傷の進行を速めるだけかもしれない。ハヴェルの研究では、はるかに長い時間にわたって出力を維持できるエネルギー源が提案されていたが、現存するどの仕様書にも、期待どおりの性能を発揮したという証明はなかった。

「じゃあ、電源が機能しても」とロイは言った。「身体は壊れるかもしれないのか」

「そうだ。身体を修復できたとしても、電源が壊れるかもしれない」

レイチェルは老大臣の刃を思い出した。儀式の間で、ロイは異常なほど強烈なエネルギーの衝撃を受けた。しかしハヴェルが目に見える外部電源を携えていたわけではなかった。その観察結果だけでは、彼の技とヘリウム3の提案との関連は立証できない。

だが、利用可能なエネルギーの量と、身体がそれをどのように振り向けるかの違いについては、調べる価値があった。

ロイは左手を伸ばし、それから握り締めた。右腕の固定具が肋骨のあたりに触れていた。

「あいつと戦ったとき、俺はずっと、もっと強くなろうとしていた。あいつは俺に、間違った場所で力を使わせ続けた」

「有益な観察だ」とエイドリアンは言った。「だが、設計仕様にはならない」

ロイはかすかに笑った。

「あいつなら、あんたを気に入っただろうな」

エイドリアンは作業台の上の動かない模型を見た。

「そうでないことを願うよ」

05 — 目録査察官

査察官は四十三分間、受付にとどまっていた。病棟に入ろうとはせず、病院の管理責任者に、事務局からの資料保全通知を受領したかどうか確認を求めていた。

管理責任者は受領したことを認め、評議会の法律担当者との面会を提案した。

彼は断った。自分の権限は資料の保全に関するものであり、管轄権をめぐる問題の解決ではないという。

レイチェルが到着すると、彼は目録の様式を表示したタブレットを差し出した。機器、歴史的文書、試料を記入する欄があった。そして最下段には、固有の技術的特性を有する人員を記入する欄が設けられていた。

「これはどういう意味ですか？」とレイチェルは尋ねた。

「標準的な分類項目です」

「病院で？」

「国家の連続性に関する評価においてです」

彼女は独立評議会にすでに報告してあった資料の一覧を渡した。実験チャンバーと回収文書の存在は記載されていたが、個々の患者を特定できる医療記録は含まれていなかった。

彼は一覧に目を通したが、一項目ずつ読むことはしなかった。

「バッティ氏はこちらで治療を受けていると承知しています」

「守秘義務のある医療情報についてはお答えできません」

「大臣の死に彼が関係していることは、公に記録されています」

「それは彼の身体を検査していいという許可とは別のものです」

男はタブレット上の署名のない欄を見た。腹を立てた様子も、驚いた様子もなかった。レイチェルは、拒絶されることが障害ではなく、初めから想定された結果の一つであるようなやり取りを、この男は何度繰り返してきたのだろうと思った。

彼は礼を言い、この会話を目録提出要求に対する部分的な回答として登録するよう求めた。

立ち去る前に、彼は紙の通知書をカウンターに置いた。後日発令されるかもしれない移管命令の対象となり得るすべての資産を保全するよう病院に指示するものだった。

レイチェルはそれを管理責任者に見せた。

「移管命令は添付されていません」

「見れば分かるわ」と管理責任者は言った。

二人は査察官が通りを渡り、待機していた車に向かうのを見ていた。彼は病院を振り返らなかった。

研究室ではプリンターが試験結果を出力し続けていた。用紙が排紙トレーに引っかかり、リンはそれを外そうと手を伸ばした。

その部屋にいた者は誰も、受付でのやり取りを聞いていなかった。レイチェルは入口にしばらく立ち、彼らに何を伝えるべきか考えた。

06 — 同じ試験、二つの記録

事務局が目録を受領したのは、午後の評価会議の直前だった。ヴェン将軍は機器一覧を黙って読み進め、レイチェルの異議を記した付属文書のところで手を止めた。

「対象者の目録は提出されず」と彼女は読み上げた。

テーブルには別の報告書も置かれていた。かつて大臣の保管研究資料を調査した部門が作成したものだった。病院からの提出文書とは異なり、そこには数ページにわたって予測される能力が記されていた。

技術顧問は、制限を解除した生体プラットフォームの潜在的な存続期間を示す欄を指した。

「これらは設計上の仮定から導かれた推定値です。実証された性能ではありません」

ヴェンはページをめくった。「では、百年という数値は？」

「研究目標です」

将軍は報告書を閉じ、ロイの最近の行動についての評価書を開いた。彼が何年生きられるかよりも、既存の方法では彼の行動予測に繰り返し失敗していることの方が、彼女には重要だった。

文官の責任者は、対象者の完全な医療データを入手できれば、本人を確保する必要はなくなるかもしれないと主張した。

「本当にそうか？」とヴェンは尋ねた。

技術顧問は、記録の質、改変されていない構造部材の観察結果が含まれているかどうか、そして本人が特定の種類の検査を自発的に受けたことがあるかどうかに左右されると答えた。

病院がそれらすべての記録を保有している可能性は低かった。

ヴェンは法律顧問に、資料を対象とする文書と人物を対象とする文書を別々に用意するよう指示した。どちらに署名するにも、まず、それぞれに想定される権限の根拠を確認したかった。

文官の責任者はその手続きに不満があるようだった。文言を議論している間に、対象者が地区を離れるかもしれないと彼女に念を押した。

「ならば、どこへ行くのか把握しなければならない」と彼女は答えた。「評価は逮捕ではない」

彼女は前日に医療別棟で検査を受けた士官の最新状況を尋ねた。担当医は二度目の評価を実施してよいと判断していた。

「当面、施設内にとどめておけ。もう一方の部隊を立ち会わせずに結果を得たい」

会議は続いた。将軍の脇の机には、病院の一覧と軍の予測資料が、異なるファイルに収められたまま置かれていた。

どちらも『百年計画』として分類されていた。

実際の実験について記述していたのは、一方だけだった。

07 — 異質な試料

夕方近く、リンは実験チャンバーから三つ目の試料を取り出した。表面の縁に、ごく小さな凹凸が生じていた。それは修復の証拠ではなかった。生物学的過程の証拠ですらなかった。試料は一度も生きていたことがないのだから。

彼女は凹凸を撮影し、番号の付いた容器に試料を収めた。

関連する製造記録を確認していたレイチェルは、旧計画の材料参照番号に、互いに矛盾する二つの説明が割り当てられていることに気がついた。公開資料庫では、旧式の実験装置を指していた。ハヴェルの資料から回収された複写では、軍の契約における受入規格として登場していた。

エイドリアンは、二人が同じ参照番号を見ていることを確認した。

複写には検査印と日付があった。受領部門を記載する欄の大部分は黒く塗りつぶされていた。検査印の下に、一行だけ読める文字が残っていた。

『民間への供給を禁ず』

古い検査印だった。材料がもともと軍事用途のために開発されたのか、それとも既存の民間技術が後になって軍に移管されたのか、文書からは判断できなかった。

二人は原本を入手するまで、この参照番号についてこれ以上の解釈を加えないことにした。

ロイは作業台の向こう側で、その話を聞いていた。

「身体に使われた可能性はあるのか？」

「あり得る」とエイドリアンは答えた。

「俺とは違う身体にも？」

「それを判断するだけの証拠はない」

ロイは給水所の外に停まっていた通信車両を思い出した。車内にいた者たちは、自分を容疑者として調べていたのか。それとも、自分よりもよく理解している技術の実例として調べていたのだろうか。

レイチェルは受入記録の原本を請求した。資料庫のシステムは参照番号を認識したが、その後、国家の連続性に関する審査が終了するまで、外部からのファイルへのアクセスが停止されているというメッセージを返した。

請求の記録は研究日誌に保存された。

その日の午後、それ以上のことは分からなかった。

08 — 一日ずつ

夕刻、冷却回路が切り離されると、壁の内側の音も静まった。リンは翌朝まで戻ってこないよう言われ、帰宅した。エイドリアンは実験記録を独立審査機関へ持っていった。

レイチェルは報告書を仕上げるために残った。結論は短かった。製造された人間の寿命が延びることは実証されていない。提案された装置を使った治療を正当化するに足る証拠はない。一つの材料で観測された差については、さらなる調査が必要である。

ロイは彼女の肩越しにそれを読んだ。

「分かったことは、これだけか？」

「確かに分かっているのは、これだけよ」

彼は彼女の隣に椅子を引き寄せた。静まり返った研究室で、負傷していない方の手を作業台の縁に置き、皮膚の下で腱が動くのを見つめた。その手の内部にある材料の一部は、古い受入規格に記載されていたものかもしれない。あるいは、これから彼らが見つけるどの記録にも、一度も登場していない材料かもしれなかった。

「どれくらいかかると思う？」

レイチェルは画面から顔を上げた。

「今日何が起きたかを理解するまで？　一週間くらいかもしれない。誰かを百年間生かし続ける方法を理解するまで？　それは、いつになるか答えられないわ」

彼はうなずいた。その答えは前日から変わっていなかったが、二人を取り巻く街は変わっていた。

窓からは、旧省庁の敷地を出ていく車列が見えた。先頭の二台には通常のナンバープレートが付いていた。それに続く車両には、病院から見える範囲にプレートはなかった。交差点では、車列が通過する間、信号機が普段とは異なる点灯パターンを維持していた。

レイチェルは通りが元に戻るまで見守った。

「今夜はここまでにしましょう」

ロイはノートを重ねるのを手伝った。二人は実験材料を、病院の保管封印が施された施錠棚に残した。小さなチャンバーは次の試験まで空のままになる。

街の別の場所では、別の研究室が、もう一つのチャンバーを開こうとしていた。担当医は機器を点検し、評価実施許可書に署名し、扉の脇で待った。灰色のコートを着た男が、誰の介助も受けずにその扉を通って入ってきた。

許可書には、彼が患者であるとは記載されていなかった。

彼は、評価対象の装置として記載されていた。

第02章 終。